

「明日は何時に起きようか」「お昼は何を食べようか」といった身近なことから、事業上の大きな契約まで、人生は「決断」の連続といっても過言ではありません。

決断とは、こうしようと思志をはっきりと決定することですが、特に企業をはじめとする集団のリーダーは、それが正しくなされるために、日々ビジネスに必要な情報を収集、精査、吟味、分析し、企業の進むべき道を見出すといった日々を過ごしていることでしょう。

右にするか左にするか「いざ決断」という岐路に立った時、判断を誤らないために必要なもの一つに「判断の目安」を持つことが挙げられます。損得、正否、美醜といった価値観、現状打破、長期展望の観点等々、多様な判断基準が立てられますが、「倫理経営」の観点から、その手がかりの一部を挙げてみたいと思います。

① 目的・目標

甲乙いずれかの選択を迫られた場合、決断内容が自社の事業目的と目標に沿っているかどうかを見直すと、意外とスッキリと決断を下せる場合があります。もちろん、その事業目的の適正性や実現への意欲の度合いといったことは、決断以前の問題です。決断とは、日頃の事業目的への向き合い方が問われる時でもあります。

いずれにしても、事の大小にかかわらず、決断時には、その内容が事業の目的及びその実現のための目標に叶う最適解であるかどうかを熟考する必要があります。



小さな決断の積み重ねが 大きな決断を左右する

② 周囲の賛同

どのようなスタイルの組織であれ、その成員の考えや思いの一致が事業成功の重要な要因になります。特にリーダーに近い人たちの賛意が深ければ深いほど、事を成す力は大きくなります。決断の時も同様に、事前に社内の幹部等、身近な人たちに相談し、理解と賛同が得られると、後の取り組みもスムーズに進むでしょう。

特に重視すべきは、配偶者や家族の理解です。時に厳しい意見がぶつけられるかもしれないませんが、それは決断者であるリーダーを最もよく知り、虚飾のない助言を寄せられる唯一の存在だからです。事業がうまく進まない背景には、家族の理解と協力が得られていない場合が少なくありません。

③ 決断時の心境

何かを決めねばならないときに、急ぎ、恐れ、憂えといったマイナスの気持ちがあることもありますが、そんな時は、過剰な「欲」に引きずられていないか確認する必要があります。「どうすることが周囲の人々が最も喜ぶことになるか」という問いを深く考えることで、「欲」から解放され、自ずと取るべき道が見えてきます。

正しい決断は、「明朗闊達」な心境から生まれるものです。①②③に示した内容は、その心境に至る道筋でもあります。

朝の目覚めから就寝まで、日ごろから、明朗な心境を磨き高め、小さな決断を正しく行なう修練の積み重ねが、いずれ訪れる大決断の時に役立つことでしょう。